

個別支援のソーシャルワークにおける科学的実践に向けた研究法に関する一考察 —岡本民夫のソーシャルワークの科学化に係る構想に基づく研究法の検討—

○ 法政大学 間嶋 健 (8653)

キーワード：ソーシャルワークの科学化、Evidence Based Practice、科学的実践

1. 研究目的

ソーシャルワーク（以後、SW）の科学化や、科学的実践に関する研究法やアプローチは、SW領域における重要なテーマの一つであり、これまで多くの研究がなされてきた。例えば、太田(1992)のエコシステム構想は情報処理技術を用いて SW 理論を取り込んだ諸ツールを開発し臨床で活用するものであり、理論的根拠のある実践を整備する環境開発は大きな意義の一つと考えられる。また、Evidence Based Practice(EBP)の文脈からは大島らのプログラム開発（大島, 2016）や、芝野（2015）のモデル開発（M-D&D）がある。これらは標準的・典型的な支援方法の構築に優れている手法といえる。

これらの研究法に加え、個別支援における臨床判断（ミクロレベルの EBP）にむけた研究法として注目されるのは、岡本(2007)の SW の科学化に係る構想である。岡本(2007)では SW の科学化を図る方法として、①「利用者ニーズの論理化」、②「実践の科学化」、③「科学研究の成果」を、「並列や攪拌ではなく」、「弁証法的な展開」により「融合」するモデルを構想した。それに対し河合隼雄氏は「その弁証法的展開の媒体、つまり媒介になるものをどういう風にしてひっぱってくるんや」と、3 要素を融合するための「触媒」の必要性を指摘し、「新しい独自研究法の産出」とともに課題として残っている（岡本, 2007）。本研究では、その構想に基づき、個別支援の SW における科学的実践に向けた研究を行った一例から、その研究法のあり方を考察する。

2. 研究の視点および方法

個別支援の方法論である EBP は「患者の嗜好」、「エビデンス」、「臨床的専門性 (clinical expertise)」を伴って、臨床判断を下すというモデルである (Sackett, 1997)。そして、EBP におけるこれらの要素は、岡本(2007)の①③との対応関係を見ることができる。すなわち、個別支援方法の EBP のモデルと、研究方法の構想である岡本(2007)の「新しいソーシャルワークの展開」のモデルの間に相似性を見出せば、「融合化」は、臨床での活用を考慮する「臨床的専門性」のうちに図られるのではないかという視点が得られる。

3. 倫理的配慮

本研究は人を対象とせず、日本社会福祉学会研究倫理規程に抵触しないことを確認した。

4. 研究結果

間嶋(2021)では介護老人保健施設での退所支援の SW について、利用者家族が有する課題、および退所支援の方法を、支援相談員の実践記録や、全国の支援相談員の著述をデータと

して、帰納法的な分析により、構造化した。そして、EBPのステップに則り、「課題」と「支援方法」を対照させながら、「Clinical Question」を導出し、活用される科学的知見(エビデンス)を探索し、批判的に吟味した。そして、「課題」、「支援方法」、「エビデンス」を総合させて退所支援を論じた。その研究法としての機序を次に要約して示す。(1) 実践現場の支援記録を収集する。(2) 実践者の取り組みに関する質的データを収集する。(3) データを帰納法的に分析し構造化する。(4) 活用可能なエビデンスを探索し、批判的吟味により検討する。(5) 総合的な支援論を作成する。

5. 考察

本研究法により、岡本(2007)における前項、①～③の「融合化」を図った。つまり、本研究の知見に基づいて、何らかの思索や行動、臨床判断を行ったとき、その実践には、①～③の知見が融合し内在しているということができると考える。そして、その実践は、一定の科学性を持つ調査方法や分析方法を用いた知見に基づいていることから、科学的実践と言えらるだろう。また、岡本(2007)にて提起された「触媒」とは、本研究においては「実践での活用性」であり、その重要な存在(媒介)はプラクティショナー・リサーチャーと考えられ、実践の場で研究活動を行う実践者(研究者)が、研究機関と実践現場との間を媒介し、学術的文脈と臨床的文脈の整合を図り、実際に研究成果を現場で使用する機能を果たす必要がある。本研究法に基づけば、多様な領域の支援を体系的に論じることができると考えられ、「新しい独自の研究法」の一つとなる可能性も考えられる。例えば、(1)～(5)の取り組みを、複数の実践者と研究者が協働、分担して行うことで、新規的な社会問題やその対応方法を迅速に分析し、ボトムアップに社会化することができると考えられる。本研究の課題として、(2)については、実践者が様々な活字媒体での著述をしていることが前提となるが、特に学術集会での事例研究発表が注目され、多くの実践者が事例研究を行うことが実現する研究方法論や、倫理的配慮のあり方の検討が必要と考えられる。

文献

間嶋健(2021)『介護老人保健施設の退所支援におけるソーシャルワークの検討～エビデンスを活用する実践にむけて～』東京都立大学人文科学研究科博士論文。

岡本民夫(2007)「ソーシャルワークにおける科学化を問う」『社会福祉実践理論研究』Vol.16.25-34.社会福祉実践理論学会。

大島巖(2016)『マクロ実践ソーシャルワークの新パラダイム --エビデンスに基づく支援環境開発アプローチ～精神保健福祉への適用例から～』.有斐閣。

太田義弘(1992)『ソーシャルワーク実践とエコシステム』誠信書房。

Sackett, D. L., Richardson, W. S., Rosenberg, W., & Haynes, R. B. (1997). Evidence-based medicine: How to practice & teach EBM. New York: Churchill Livingstone

芝野松次郎(2015)『ソーシャルワーク実践モデルのD&D --プラグマティック EBP のためのM-D&D』.有斐閣。